

## 【執筆の前に「読んでください」】

### 第七集、井上荒野先生の選評の抜粋「小説と読み物と」

回を重ねるうち、応募作の質は大まかにいって二方向に分かれてきたと思います。つまり、小説と読み物とに。

私の分類法では、(毎回、「このことと言いますが）、粗があっても、破綻があっても、その作者にしか書くことができないもの、その作者がそれを書く意味を持っているものが、小説です。読み物というのは、すでに世の中に出回っている物語のパターンを、登場人物や設定を変えて(この賞の場合だったら、舞台を深大寺にして)焼き直しただけのもの。安心して読めますが、衝撃も興奮もない。最初の五行を読んで予想した通りの結末になるもの。

私が選びたいのは、言うまでもなく小説のほうなのです。

これから書いてみようという方々への、ひとつの提案ですが、たとえば次のような制約を課してみてもいかがでしょうか。

- 1、初恋の人を登場させない／登場させても良いが、三十年後に深大寺で偶然会わせたりしない。
- 2、恋人、あるいは伴侶を病氣とか事故で死なせない／死なせても良いが、死んだあとでその人と面影が似た人と偶然出会ったりさせない。あるいは、その人が生前遺した手紙か何かを、三十年後に偶然見つけたりさせない。

3、「意地っ張りで男勝りで不器用なワタシ」と「天然なアイツ」の組み合わせを使わない／使っても良いが、この組み合わせは少女漫画で使い古されたパターンであり、よほど突出したものがないと評価は得られない、ということを確認する。

「偶然」は、なるべくなら使うのをやめましょう。使う場合は、それを小説の本筋とからめないことです。

### 第八集、井上荒野先生の選評の抜粋「あなたがそれを書く意味」

(最終審査をした)候補作十八篇のほとんどが、まるで印象に残らない。ひとつにはタイトルの付け方のいいかげんさ、そしてもうひとつは、どれもが「どこかで読んだことがあるような物語」だったせいだと思います。

小説とも言えないつまらない読み物を読んでいると、「作者たちは、これを書いているとき、いったい面白かったのだろうか?」と思います。そこら辺にいくらでも転がっている筋書きの細部を深大寺向きにちよっと直してみる。そんなものは創作ではなくて漢字の書き取りに近いものです。

なぜ自分はこの物語を書きたいのか。ほかの誰でもなく「自分が」その物語を書かなければならない意味はどこにあるのか。どうかそれを考えてください。小説を書くことと思うなら(ばかばかしいほど当たり前のことですが)小説をたくさん読むことも大切です。その際に、「さくさく読める」ものばかりではなく、ハードルの高い、読むのに多少の努力を要するものにも、チャレンジしてみてください。ハードルを越えたときに、あなた方が知らなかった「面白さ」や「感動」に出会えると思います。たぶん、あなた方が知っているよりも、無数のすばらしい小説が、この世界にはあるのです。そのすばらしさを、どうぞ体験してください。

(今回は)作者にしか書けない一行、作者が自分自身の感性で感じ取った何か。それがひとつでもあった作品を、評価しました。

ただ、ムードに流されて、くどくなっている箇所が幾つか。十行使って書いているところを、五行であらわせないかどうか、考える練習をしてみてください。言葉を連ねるのではなくて、選ぶことです。